

「見えなかった」コロナ対策、検証あってこそ進化

サイエンス Next Views 編集委員 矢野寿彦 2023/6/18 日本経済新聞

1901年、最初のノーベル賞を手にした人物がドイツ出身の科学者、レントゲンである。彼が発見した未知という名のX（エックス）線は「新しい光」とも呼ばれた。さまざまな見えないものを映し出す。20世紀の物理学や医学が発展していく「科学の扉」になった。

宇宙や生命のなぞに迫る科学は、哲学や宗教と違って、見えないものを見えないまま対処するのが苦手だ。画像やデータなどに、あらゆる手をつくし対象を客観化しないと前に進まない。PCR検査や磁気共鳴画像装置（MRI）、重力波の検出、といった可視化のテクノロジーが度々ノーベル賞に輝くのもうなずける。

未知のウイルスが出現し、瞬く間に世界に広がり人々の命を奪っていく。そのまん延に社会はおののき、大きく混乱する。3年あまりに及ぶ新型コロナのパンデミック（世界的大流行）は小さな病原体、そして死への恐怖という「見えないもの」との闘いだっただけ。

「3密」や「クラスター」「新しい生活様式」といった、はやり言葉をいくつも生み出した日本のコロナ対策。果たして科学の力をうまく引き出したといえるだろうか。

2023年3月、医療・医学に詳しい政治家、武見敬三参院議員に日本の対策を総括してもらった。「人的被害を低く抑えることができたのは、手洗い、マスクといった国民の習慣のおかげ。政策がよかったわけではない」

感染症という有事に対する政府の危機意識は低かった。義務なき行動制限を国民一人ひとりが実直に守ったことが大きかった。たまたま運がよかったということなのかもしれない。

振り返れば、20年春の「第1波」のころはPCR検査が普及せずに感染状況が正しくつかめなかった。決め手となる国産ワクチンもいまだに実現していない。鳴り物入りでできた「接触確認アプリ」はいつのまにかどこかへいった。

英社の調査によると、19～21年の論文数などからみたコロナを含む感染症研究の実力をはかった世界ランキングで日本は12位、G7参加国で最下位だった。データ収集力の弱さと使い勝手の悪さから、かねがね指摘されていた臨床医学の弱さが露呈された。

ウイルスの変異に対する対策の柔軟性も欠いた。新興感染症のように事態が刻々と変わる場合、科学的知見も「誤り」があるものとして、常に最新のものに改定していかなければならない。「作動中の科学」と呼ぶが、専門家は自らの成果にひきずられ修正を拒んだ。

22年から病原性が弱まったオミクロン型が流行の中心となっても、対策は従来のみで経済・社会活動の回復を遅らせた。

コロナを見えなくした「5類」への移行から1カ月あまり。科学は検証があってこそ進化する。今やるべきは、3年間の対策をいろいろな視点から徹底的に確かめ、日本の強みと弱みを見つけることだ。政府も国会も専門家も、国民に「見えるもの」を残してもらいたい。

東京大学大学院経済学研究科 仲田泰祐准教授

コメントメニュー

別の視点緊急事態宣言・水際対策等にどの程度感染抑制効果があったのか、という基本的な問いに関しては、ランダム化実験が出来ないこともあり、科学的分析でははっきりとし

た答えが出にくいです。

様々な仮定を置いて、観察データを基に上記のような質問に答えを提示することは出来ませんが、回答は置いた仮定に依存します。また、こういった検証的分析を行っても良い学術雑誌に掲載しにくいので、取り組み続ける研究者は（私の知っている限り）日本ではほとんどいません。

「ランダム化実験が出来ない。データからは答えが出ない。」という状況で科学者・研究者がどのように政策に貢献できるか、をより多くの人々に考えて頂ければと願います